

# 井上文雄 『調鶴集抄』

—— 翻刻と解題 ——

鈴木 亮

## 【解題】

徳川時代後期の国学者歌人井上文雄（明治四年歿、七十二歳）に私淑する森田義郎といふ歌人があつた。正岡子規の門下であり、歌集は歿後、甥玉置富次郎によつて纏められてはゐるものゝ、未完のもの、であり、今日に於て其の名を知る人は尠い。略歴を記せば、以下のやうなものである。

明治十四年四月六日、森田義郎は愛媛県周布郡新屋敷村（現、西条市小松町）に父富藏、母フミの第五子（次男）として生れた。万葉草廬主人・四千児・斑駒生等と号し、本名を義良といふ。松山中学校（現、愛媛県立松山東高等学校）に学び、上京後は國學院に修学。同郷の先輩歌人石樽千亦の紹介で、病床にあつた子規を訪ひ入門、根岸短歌会に参加してゐる。剃髪程度したこともあつたが、後、調精術といふ健康法に就て研究を重ねたり、政治運動に邁進したり

と様々な分野に於て活動をした。『短歌小梯』（明治三十六年刊）、『万葉私刪』上下（明治三十六、三十九年刊）、『調精術』（大正七年刊）他の著述がある。昭和十五年一月八日歿、享年六十。墓は本淨寺（東京都豊島区雑司ヶ谷一丁目）に現存する。

郷里を想ひ、幼い頃から見慣れ親しんだ石鎚山（石鉄山）を詠じた晩年の作品「石鉄百首」（『日本及日本人』昭和七年三月、七月）が代表歌とされてゐる。試みに二首引用する。石鉄山に対するなつかしさが感得出来るであらう。

われもまた伊予の孤児みなしこいしづちと燧の波に恋知りそめて  
生れ出しその時よりぞ目かれせず我れを守りし石鉄の山

森田も子規と同様、晩年は病気がちであり、四十四歳にして妻子と別れ、一旦帰郷した後は、各地を転々とする。望郷の念、一人であつたはずだ。

森田の和歌に関する研究といへば、『万葉私刪』上下、『万葉長歌

『評釈』、『万葉短歌評釈』を刊行してゐることからも解るやうに、万葉集を専らにしてゐる。万葉調を主張した子規の門人にしてみれば当然のことでもあらう。しかし、万葉研究にとゞまらず、井上文雄、大倉鷲夫（嘉永三年歿、七十二歳）、平賀元義（慶応元年歿、六十六歳）といった幕末期に活躍した歌人に就ても可なり筆を執つてゐるのである。中でも井上文雄に関しては、「忘れられし井上文雄」（『日本及日本人』明治三十九年六月）、井上文雄翁について（『東亜新報』明治四十一年五月）等を著し、其の魅力を広く紹介してゐる。

さうした流れの中で、此処に紹介する『調鶴集抄』は編輯された。文雄の家集『調鶴集』（慶応三年刊）をはじめとして、二十余巻八万首を収録するといふ「松の門ミサが手記せるもの」（現存未詳<sup>5</sup>）、そしてそこから秀歌を選び出した一本「園田守英が筆記せるもの」（天理大学附属天理図書館所蔵、佐佐木信綱旧蔵）といった歌集から森田は自らの好むところの歌を抄出し、正宗敦夫の発刊による歌学雑誌『国歌』三十号（明治四十二年一月）の附録として發表した<sup>4</sup>。発行の次第は、巻末「この書を發行するについて」に詳しい。「予文雄の為人を愛し、其の歌を好む。」と文雄への傾倒ぶりが語られてゐる。この文雄に対する愛情こそが『調鶴集抄』編輯の大きな動機となつたのであらう。識語に於ては、自らを「その歿後十五年にして伊予の国に生れたる」と記すが、文雄の逝いたのが明治四年、森田は同十四年に生れてゐるので、「歿後十五年」といふは、いさゝか疑問が残る。

『国歌』は、国立国会図書館に於ても一冊（百十七号、大正十三年九月）しか所蔵されてをらず、閲覧が頗る困難な雑誌である。附録に至つては尚のことである。ところが、この『歌学』附録として刊行された小冊子『調鶴集抄』を、先般偶々古書肆にて入手することが出来た。明治後期の活字本ながら、珍本とも言ひ得る書であるゆゑ、此処に翻刻、紹介する意義は深いものがあると確信する次第である（写本『調鶴集』は、これ迄殆ど活字化されてこなかつた<sup>5</sup>）。『調鶴集抄』を纏める数年前、森田は文雄の業績を顕彰すべく全集を刊行しようとの思ひがあつた<sup>6</sup>のだが、結局果せぬまゝ、亡くなつてしまつた。森田の無念、察するに余りある。

『調鶴集抄』の収録歌数は百九十五首、うち板本『調鶴集』所収歌は六十六首。すなはち三分の二にあたる百二十九首がほぼ百年振りに陽の目を見ることになるのである。

なほ、斎藤茂吉は、森田からこの小冊子を借りて披見してをり、その次第を『童馬漫語』（大正八年、春陽堂）に記してゐる。

森田義郎氏は、いたく井上文雄を尊敬してゐる。予も氏から氏の編輯に繋る「調鶴集抄」を借りて一読した。文雄の歌風を一貫するのは軽妙の二字である。そして品の好い清心の歌が多い。新しい材料で一寸他の歌人などの気のつかないやうな細かいところを巧みに詠んでゐる。曙覧よりも軽いが才はある。歌の爲めに入牢したなどは思へない程な歌ばかりである。熱心な勤王家だと聞いたが、何処かに品のよいやさしいところがあつ

た人であらう。

其の詠風の特徴を「軽妙」であると捉へ、新鮮な題材を以て詠んでゐると述べる。文雄に関してまで注目はしてゐないが、ある程度の関心はあつたのではあるまいか。

1 『森田義郎歌稿』。小松温芳図書館（愛媛県西条市小松町新屋敷）所蔵。

2 『近代文学研究叢書第四十五卷』（昭和五十二年、昭和女子大学近代文化研究所）、山上次郎『歌人森田義郎と子規・飄亭』（昭和五十四年、古川書房）参照。

3 『調鶴集』（文久元年成、写本、天理大学附属天理図書館蔵）佐々木弘綱序文に、「井上翁のはやくよりの詠艸を何くれとしどけなくしるしおかれたるを、小川みさ子清う書あらためて調鶴集と名づけつるが、甘巻余もあるが中より、さいつ年おのれ江戸にありける比、こゝかしこをぬき出て一卷写し來つるに、其のち見もし聞もして書とゞめつる反古のあまたあるを、こたび園田守英歌席に携る作例の料にとて、かきくはへてかく小冊にもものしつる也けり」とある。

4 近藤美智子「正宗敦夫編集発行『国歌』総目録」（『古典研究』二十一号、平成六年四月）

5 『調鶴集二編』は、下村海南「短歌と新聞」（山本三生編『短歌講座第十卷』昭和七年、改造社）に一部翻刻がなされてゐる（入牢の歌）。

6 森田義郎「忘れられし井上文雄」（『日本人』四百三十七号、明治三十九年六月）

### 〔凡例〕

- 一、底本は、架蔵本（明治四十二年刊『国歌』三十号附録）を用ゐた。
- 一、仮名遣ひは底本の通りとした。
- 一、漢字、仮名の使ひ分けは底本のまゝである。
- 一、漢字は概ね通行の字体に統一した。
- 一、私に歌番号を算用数字で頭書した。
- 一、底本に於ては、結句のみ二三行目に書かれてゐるが、一行に改めた。
- 一、改頁箇所には煩雑になるため、特に明示しなかつた。
- 一、板本『調鶴集』所収歌に就ては、末尾に括弧書きで『新編国歌大観』の歌番号を記した。

### 〔書誌〕

- 判型 B6判（縦十八・一糎、横十二・四糎）
- 装訂 一卷一冊 大和綴 白色厚紙表紙

○外題 左肩、万年筆(紺色)にて「調鶴集抄」(左横書)

○蔵書印 「正宗文庫」(正宗敦夫旧蔵)

○頁数 三十六頁(一～三四まで頁数の記載あり)

○本文 一頁十二行(短歌一首二行)

○跋文 一頁十三行  
○奥附 「明治四十二年一月十三日印刷／明治四十二年一月十五日発  
行」(『国歌』三十号)  
○架蔵

【翻刻】

調鶴集抄

井上文雄著  
森田義郎抄

四季

- 1 たをやめが衣の下のひもかがみとくとまたれし春は来にけり
- 2 武夫の手にとりならずみちのくのあたたら真弓春は来にけり
- 3 賤をやまのしづがの女がさよみの布のふる衣ときて洗ひて春は来にけり(イ六)
- 4 今朝よりは長き春日のはじめぞと思ふすなはちのどけかりけり
- 5 竹芝や大井品川おしこめて江戸の大門ぞかすみそめたる(一一)
- 6 あけそむる大城のついちほのほのとひとすぢ白き初霞かな
- 7 武蔵の海汐瀬にならぶ船のほに朝東風見えて春は来にけり
- 8 たちかへる春の初潮さしつけに霞む湊の浪のおとかな
- 9 淡路瀉あはとかすみてもろ人のゑみの眉山春は来にけり(四)
- 10 さかづきのつきせぬ春のためしをも思へばまさに千代の薬子

- 11 をとめ子が今朝なめそむる盃をとりあへず鳴く鶯のこゑ  
12 若水に今朝まづ洗ふ石すずり朽ちぬ言の葉書きながさばや  
13 さほ姫の霞の袖の口おほひ笑ふと見えぬ山眉もなし(一八)  
14 宵の間はしめやかに春の雨の更けて雪けになりけるかな  
15 山河の岸の小草の薄もえ黄おしひたしたる春の水かな  
16 春風はあらしになりて梅が枝のともずりしげみ花もたまらず(三八)  
17 立ちまぢるをの子がさまをにげなしと手鞠つく子のつきしろひつつ  
18 ひきつれていての舎人のけしきよく弓とるかたの殿につどへり  
19 水口に誰おりたちて洗ひけむ若菜流るる畔のせせらぎ  
20 少女子よ夕菜の小芹早摘み来田づらの日影いまだみじかし  
21 たきすてし賤があくた火けをぬるみ田畔の若菜もえそめにけり  
22 旅人の朝立つ道の松の火も霞にしろくあけそめにけり  
23 遠山はかすみこめたり遠山はいよいよ遠くかすみこめたり  
24 あはと見し安房門も見えず見渡しの上総根つづきかすみこめたり  
25 住吉のお前の浜の姫小松春は霞の摺裳きにけり  
26 古の春をかけたる横霞今も浜名の橋づくりして  
27 朝東風の南になりし夕庭に梅が香ぬるく鶯のこゑ  
28 青柳の糸につらぬく朝露の玉をならせる鶯のこゑ  
29 眉ごもる柳の枝に鶯のおのが青羽をほこりてやなく  
30 神楽坂春の夜嵐さえかへりかたおろしにもふる霰かな(三九)  
31 氷あしたなるの樋口音たてて梅が香流す春風ぞ吹く  
32 雨はれし朝露ながら散る梅の花の香波まむいさら井の水

- 33 朝手あらふ庭の板井のほそ流れひさごに梅の花をこそせけ
- 34 打かすむ柳の糸のおのづから片よるほどの風はありけり
- 35 春雨の霞の袖にかさねたる若草ずりは誰か著るらむ
- 36 夕鳥の寐に行くをちの里林霞になりて小雨ふりきぬ
- 37 四阿のまやのあまりに霞む夜の月影ながら春雨のふる
- 38 打かすむく手の道の朝じめりしめしめ雨になりけるかな
- 39 隅田川中洲をこゆる潮先に霞ながれて春雨のふる (六三)
- 40 小山田の畔のあくた火うちしめり霞む方より春雨のふる
- 41 はるばるとさきつづきたるすずな畑半霞みて春雨のふる
- 42 うち霞む汐瀬の舟は動くとも行くともなしに遠ざかりぬる (六七)
- 43 春の野の道とひよりに思はずも蕨とる子にならひけるかな
- 44 思ひ立ちたのむの雁のこゑ聞きて入間男や種をかすらむ
- 45 たをやめを路に行きあふ心地して初花桜見そめつるかな
- 46 夕日影簾にうつる花の枝をかきまぎらはすつばくらめかな
- 47 朝雨は霞になりてすずな咲く畑の中道ひばりなくなり
- 48 はるばると葦さく野の朝霞うするるかたにひばりなくなり (七二)
- 49 山添の畑の大麦くき立ちて霞む日影に雉子鳴くなり
- 50 岡越の路の麦生に生ひつづかずしろがくれ雉子なくなり (六九)
- 51 岡のべの賤が園生の桃林ほろほろ散りてきぎすなくなり
- 52 里の子がついちのくづれ踏みあけて我庭にさへ摘む葦かな (一一三)
- 53 河岸に朽ちし榎のかたぶきしうつばに咲ける花葦かな
- 54 わが宿の垣根の葦むらさきの色濃き時を春雨のふる

- 55 咲きにけりうなるばなりが手すさびに植ゑて三年の桃のわかだち (一〇八)  
 56 宵のほど暖かなりし春雨のはるる朝庭花咲きにけり  
 57 紅のうす花桜たをやめのすこし酔ひたる俤にして  
 58 さほ姫の霞の袖の糸桜このぬひものを妹に著せばや  
 59 もくづたく伏屋の門の塩尻に白くも花の散りかかりけり  
 60 うつろひし梢をすぐる風先に花の跡追ふ蝶もありけり  
 61 桜花散りてこぼれて奥山のいはほの中も春ふけにけり (一〇一)  
 62 渡守棹さしすてて昼寐する野河の岸の花散りにけり  
 63 桜散る田畔のつつき細流れ濁れる水も花の香ぞする  
 64 岡越の道の小寺のつづち垣ほろほろ散りて人影もなし  
 65 やつ橋の水のくも手を引き分けしここにも咲けるかきつばたかな  
 66 桜花散りてうかべる苗代のかげひの清水春更けにけり  
 67 しめはへて水口祭る畔つづき苗代ぐみの花咲きにけり (一一六)  
 68 里川の岸の片洲にしろかきて注連引きはへて種おろしたり (一一七)  
 69 霞つたなるの水にやどり来る月ふみ濁し蛙なくなり  
 70 水あせてなかは野となる沢水の葦がなかに蛙なくなり (一一五)  
 71 賤の男がしろかきすてて立ち帰る畔のぬかりに蛙なくなり  
 72 摘みすてし葦ながるる里川の水の落合蛙なくなり  
 73 かきつばた咲くや板井の桁こえてあまる清水に蛙なくなり  
 74 かへる手の若だちまじり結びこめし垣の山吹花咲きにけり (一一九)  
 75 すすな散る畑の小河の落合に靡きかかれる山吹の花  
 76 ゆきけたのくも手尋ねて咲きかかる藤の花ふむ山のかげ橋

- 77 花は根にかへりし跡の弥生山片破月のひとり霞める
- 78 水車まどほにめぐる烟河に山吹散りて春更けにけり
- 79 春雨にこぶしかつちる山添の小寺の垣根しとどなくなり (一二九)
- 80 あげまきよいなるのみ草かきはらへ今日種かすによき日なりけり
- 81 花もなき畑のさかひの若くぬぎ春にはもれずうす緑せり
- 82 唐めきし黒木赤木のませゆひて植うべき花はぼうたんの花 (一二二)
- 83 御仏に水そそぐ日と里の子が寺田の畦にうつぎ折るなり (一三九)
- 84 山添の竹のわれ樋のわれて落る水の落先卵の花の咲く
- 85 東に流れてここに法の水今日は仏にそそぐなりけり
- 86 雨そそぐわか桜葉の薄もえぎこの作り絵を誰にかかせむ (一四二)
- 87 畑中に木だかくしげる山桐の花ふき散らす麦の秋風 (一四八)
- 88 我が門の千町の畠に生ひ立ちし小麦の秋の風匂ふなり (一四九)
- 89 乗り捨てし岸の小舟のむやひ繩朽ちはてぬべく五月雨のふる
- 90 底清き庭井の清水桁こえて芝生に濁る五月雨のころ
- 91 梅雨は妹がちか言おもほえて何時晴るべくも見えぬなるかな
- 92 梅雨は霽れなむとして夕虹の東山になくほととぎす
- 93 やりかへせ牛やりかへせ小車の加茂の川原になくほととぎす (二六五)
- 94 夏衣かせ山寒き五月雨の久邇の都に啼くほととぎす (一六四)
- 95 潮のぼる洲先の浪のをれかへりをれかへりなくほととぎすかな
- 96 清水汲むひさごの上にこぼれけりあか井のもとの山桐の花 (一七二)
- 97 賤の女が櫛もとり見ぬ朝寝髪夕暮かけて早苗植うなり
- 98 賤の女が袖のしほとけほしあへず浜田の雨に早苗植うなり



- 99 畦つづきつがね捨てたる若苗を踏みて朝行く裳裾つゆけし  
 100 賤の女が繭の袖にこぼれけりわら屋の軒の山ぐりの花（一九四）  
 101 賤が屋の軒の山栗かれ花に咲きてこぼれて見る人もなし（一九五）  
 102 栗の花こぼれて浮ぶ里川の大樋の水に月のうつろふ  
 103 夕河の筏にかかる藻の色に横日うすれて水雞なくなり  
 104 賤の女が洗ひすてたる水口の早苗の上に螢とぶなり  
 105 足ふめば土くえかかる古川の岸のるぐいに螢とぶなり  
 106 吹く風に散るは草葉のもとの露末の雫とほたる飛ぶなり  
 107 水雞なく芦間に浮ぶ水の沫の動くも見ゆる月の影かな  
 108 名も知らぬ小草花咲く夏の野に朝ふむ露の心地よきかな  
 109 秋またぬ籬の草の一本にうつくしよしと蟬のなくなる  
 110 夕立はひさごの水を汲みあげてこぼすばかりに降り出でにけり  
 111 はたご馬荷の緒かためて道急げ野風夕立雨こぼれ来ぬ（二二七）  
 112 夕汐のみつまたの洲のむやひ舟ただわたくしの秋風ぞ吹く（二二八）  
 113 吹く風につゆの白玉ゆりすゑてすゑてはこぼす池のはちす葉（二三四）  
 114 日盛のわら屋の庭は鳥もこず山繭かこふ薄ねふりして（二五二）  
 115 朝手あらふかけひの水にうつろひて軒ばの桐の花咲きにけり  
 116 ひる寝する枕にひとつ名のる蚊の細声耳をはなれざりけり（二五二）  
 117 かけかふる蟹のむしろ帆面見えて秋立つしほのしるくもあるかな  
 118 河波は夏にかへりて日影さす中洲のあしに秋風のふく（二六一）  
 119 玉だれのをす吹上てあら海の浪に立つなり秋の初風  
 120 相摸<sup>あまも</sup>湯新防人か麻衣の袖の露とぶ秋の初風

- 121 ここちよく秋雨はるる川添の水田の面に早稲が花散る (二八〇)
- 122 落ちかかる夕日さびしき里川の堤のほたで秋風の吹く (二八四)
- 123 水浅き野沢の岸のなびき藻に靡きあひたる秋萩の花
- 124 朝雨は煙となりて薄雲の残れる空に初雁のなく
- 125 清見瀉せきの外山の夕おろしに横はしりして雁なきわたる (二八九)
- 126 ほろほろと胡桃こぼるる秋雨のふるき垣根に山がらのなく (二九八)
- 127 薄雲の夕日にかかる山の端に秋風あれて小鹿なくなり
- 128 朝貌のまとひとめてこぼれ垣それも残さず吹く野分かな
- 129 世の中のあいなたのみも先一つかなふ今宵の月の影かな (三〇八)
- 130 旅人が夕山こゆる松の火のしらむを見れば月いでにけり  
もれいづる月の光はむら雲の袖もて玉をのこふなりけり
- 131 指していくつととひし月影はかはらずながらわれ老にけり
- 132 中空に月やなりぬる庭松のいさごにうつる影のみじかき (三〇六)
- 133 たるひめの波の摺裳に白金の月をいだせる秋の夜半かな (三二〇)
- 134 片岡の杉生が中にさし出しちぎの片そぎ月いでにけり
- 135 妹がりとするひく駒の立髪の露をかぞへてやどる月かな
- 136 ゆびさしていくつと問ひし昔にも月影のみはかはらざりけり (三二八)
- 137 軒つづき藁やく烟かをりあひて暁月夜かけが声する
- 138 朝川の筏の床に真柴たく火影に霧のすこしやかれて
- 139 まだ残る夜霧を深み旅人の松の火白きあけぼのの山
- 140 旅人の朝たつとよみしづまりてうまやの火影霧に残りぬ (三四八)
- 141 山賤がはいりにつづく麓道あはぶがくれにうづらなくなり
- 142

- 143 賤の女がわなはりすてて帰りつる沢田の月に鳴が羽根かく  
 いざ子供まろが紅葉班物得たりとりつけぬべき小枝早きれ (三四三)  
 144 有明の月の薄霧しめやかに菊の香寒し暁の庭  
 145 秋もやや深くなりゆく里林柚の実まじりに色づきにけり (三七八)  
 146 山蔭にこぼるるいがを踏み来れば我栗毛さへ行きなづみけり (三九四)  
 147 秋くるる夕河添のくぬぎ原薄き日影にこがらなくなり (三九九)  
 148 もずのなく川田の畦のくぬぎ原はてゆひわたしおしねほしたり  
 149 神無月一花残るなでしこの葉末にしろく結ぶ初霜  
 150 刈り果てしせとの田面の稲くきに朝霜白く冬は来にけり  
 151 日影さす庭のほし麦賤の女がとりいれあへず降る時雨かな  
 152 時雨する田畔ゆく子が著る蓑の雫に光る夕づく日かな  
 153 口なしに匂へる花のさま見れば宿のさきはひいふまでもなし  
 154 はなれ洲のあしの枯生の日当に眠れる雁の羽づく音する  
 155 朝手あらふたらひの雫つららめて玉のぬきすをわたるとぞ見る  
 156 落ちかかる水沫ながらに氷りつつ白玉たたむ瀧の岩角  
 157 玉銚のよるゆく道にはたづみ踏むに音あるうす氷かな (四三七)  
 158 村雲を折折はこぶ風先にみそれこぼれて月更けにけり  
 159 暁のかはたれ時の星月夜きらめく時に千鳥なくなり  
 160 さしのぼる二十日の月の汐先に干潟ながれて千鳥なくなり  
 161 河原風北に吹きかはる夕汐の落合の洲先千鳥なくなり (四五七)  
 162 淡路瀉かた時雨する風先のせとのふきわけ千鳥なくなり (四六〇)  
 163 朝霜は日影にとけてかわきたる柏のふる葉霞ふるなり  
 164

- 165 世がたりをくづし出つつ埋火のもとみし人のうへも残さず  
 166 降雪に野辺狩りくればはし鷹の白班になりぬ熊のしり鞆(四九六)  
 167 冬籠る門の桑原ひこばえのしもとにまじる梅咲きにけり  
 168 つれづれとむかふすびつの釜の湯も春待つ風にわきてかよへり  
 169 門松を伐り出す賤が斧の音のほとほと春は近づきにけり  
 170 鶯の初声をまつ冬の竹笛にや切らむよき音きくべく(五二七)  
 171 冬枯のおどろが中の日あたりにあざみ一花見いでつるかな(五二九)  
 172 いしずゑもほり棄てられし故郷にたてるは霜の柱なりけり(五二六)  
 173 冬枯の垣根にまとふ梅もどきあさりつくしてひえ鳥のなく(五三四)  
 174 かみな月柚の実いろづく柴垣の日影のどけみ小鳥なくなり(五三五)  
 175 朝露にふたたびかへるしもと原日影にぬれてしとどなくなり(五三六)  
 176 この宿にけふ結び初むる元結の絶えじや千歳霜はおくとも
- 相聞
- 177 我妹子にあふひくつわをかけて行くかもの毛の馬歩み疾くせよ(六三六)  
 178 天地をぬへる袋にいれぬとも我物思の数はずきせじ(六七二)  
 179 かきおくるうの毛の筆の柔かに手枕まきてねなましものを  
 180 賤の男が外面の畑をうちかへしあはまくほしきころにもあるかな  
 181 手をとりにて教ふばかりの中の緒になどこの事は思ひゆるがぬ  
 182 かけがねのとりはづしても世に忍ぶ中の妻とは人に語るな(七四二)  
 183 心とくあはする人もありぬべしゆめゆめ云ふな一夜見し夢(七五二)

- 184 明けそむる箱根のたむけ雲深し山分衣袖しめるまで  
 185 我妹子がこくびよくせし旅衣肩まよふまでなりにけるかな (九〇七)  
 186 やつれ行く旅の櫛笥の朝鏡手にだにとらで月も経にけり  
 187 苔深こもぎ野寺の門の石たたみ棟こほれて紫にして  
 188 古寺の庭に杖つく老松は苔の衣をかさね著にけり (八〇五)  
 189 唐の五つの道をさしおきて三つの宝をねがふ鳥かな 仏法僧  
 190 君は松松は君にぞあえななむともに千年の春をへぬべく  
 191 おく霜にたわむ老木のふし柳靡なきし春の佛もなし 老女 (七八九)  
 192 うつばりの塵こそあらめ舞の袖ふるき心は露も動かず 静御前 (八二九)  
 193 よろこびにたえでや翁はほとほとといふまでもなく舞ひいでにけり 三番叟  
 194 二親の千世もと祈るひたひ髪香しき名をあげよと思ふ 元服  
 195 かちえたる春のみまへの花あはせ高麗の調を遅しとぞいふ 心地よげなるもの (八八二)

この業は明治三十八年六月なかばに始め同じき九月二十一日に卒へぬ 義郎

この書を発行するについて

調鶴集は幕末の歌人井上文雄が家集なり。もと数本あり、流布の刊本は著者が生前藤堂侯より資を得て上梓せるものにして多く晴れの席にて詠出せるものを採りたれば歌数最も鮮し。著者の侍女にして後に養女となりし松の門ミサが手記せるものは二十余巻八万首にも及び最も多し。著者の門人蘭田守英が筆記せるものは一万首計りあり。今これ等数本より傑出と思はる限りを抄出してこの書を為す。原本一一題を附す。今は特に必要あるものの他は悉く略に従ふ。文雄其の先は越後の人、数代の祖初めて江戸に出で祖父に至りて田安家に仕へ侍医たり。文雄紀元二四六〇年(光格天皇寛政二二年)

に生れ二五三二年(今上明治四年)歿す。元真と称し柯堂と号す、国学を岸本由豆流に学び詠歌を以て聞ゆ。徳川政府の顛覆するや

行末の頼みも今はなかりけり君が千代田を人からられて

徳川の濁りそそぐと逢津川潔き名を世に流しけり

等の歌を作りて旧主のために気を吐きしより官府の忌避に触れ一旦獄に繋がれたりしも、やがて許され、後その疲れのために牀に臥し遂に立たず。谷中玉林寺に葬る、文雄杏林に生れながら終生人のために葉を盛らず。故に田安家にても学者として之を遇したりといふ。予文雄の為人を愛し、其の歌を好む。今ここに数百首を抄出して遺業の湮滅を防がむとするは、その<sup>(愛)</sup>を好愛するがためのみにあらず。実に彼が如き作家は数百年にして遇々見るべきを思へばなり。

故人の三十八回の忌辰なる明治四十一年十一月十八日の朝、その歿後十五年にして伊予の国に生れたる

森田の義郎記す

(すずき・りよう 東京都立足立工業高等学校教諭)